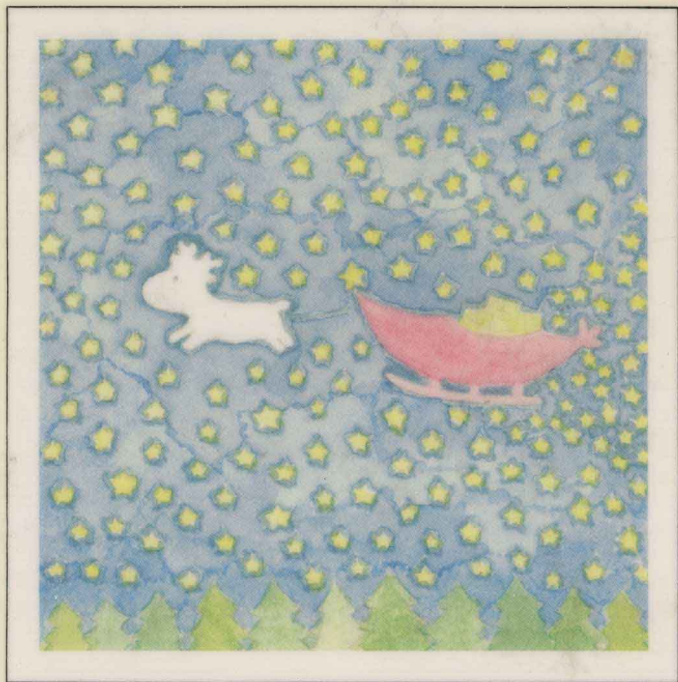


はいたつやの フィードル

白阪実世子・作 はらだたけひで・絵



わくわくライブラリー

はいたつやのフィードル

1990年11月24日 第1刷発行

定価1100円（本体1068円）

著者 しらさか みよこ 白阪実世子

画家 はらだたけひで

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21（郵便番号112）

電話 東京03(945)1111（大代表）

N.D.C.913 110p 19cm

印刷所 株式会社 精興社

製本所 島田製本株式会社

©Miyoko Shirasaka/Takehide Harada

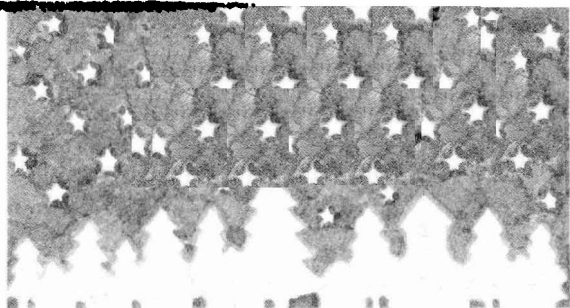
1990 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍制作部あてにお送りください。
当社は名称には責任を負いません。なおこの本は、この本の

はいたつやの

江苏工业学院图书馆
アイドル
蔵書章

白阪美世子・作 はらだたけひで・絵



講談社
PRESENTS

もくじ

1 フィードル、みせをはじめる・8月――6

2 なぞのはいたつぶつ・9月――32

3 町もぐらのモツゲ氏・10月――55

4 冬のしたく・11月――72

5 クリスマス・12月――97

はいたつやの フィードル

1 フィードル,みせをはじめる

フィードルは、せんぷうきの風^{かぜ}にあたりながら、あたまをすこし右^{みぎ}にかたむけて、右^{みぎ}の角^{つの}をほりほりかきました。それから大きなあくび^{おおお}をしました。

「あーあ、はやくおきやくが、こないかなあ。」

ここは、フィードルのみせ。

フィードルは、きょうから、ここで新しい^{あたらしい}しごとを、はじめたばかりなのです。

そうそう、フィードルはトナカイです。

でも、ただのトナカイではありません。ほこりたかき「クリスマス」のトナカイ」なのです。ふだんは、サンタクロースのいる「北きたの冬ふゆの森もり」にすんでいます。

サンタクロースは、十二月がうにはいるとすぐ、せかいじゅうの子どもたちにあげるおくりものを、よいしはじめます。

フィードルは、なかまの三とうのトナカイといっしょに、そのてつだいをします。

そして、クリスマスのまえのばん、サンタクロースとフィードルたちは、たくさんのおくりものをつんだそりを、大空おおぞらに走はしらせるのです。

フィードルがいそがしいのは、十二月^{がつ}だけで、あとは一年^{ねん}じゅう、これといったしごとは、ありません。

元気^{げんき}なフィードルは、毎日^{まいにち}がたいくつ。

そこで、ある日^ひ、フィードルはサ
ンタクロースにないしよで、またた
く星号^{ほしごう}のそうこのかぎを、あけたの
でした。またたく星号^{ほしごう}というのは、
クリスマスのおくりものをはこぶ、
あの、そのことです。

「ぜったいに、見つかりっこないさ。
だって、十二月がつにならなければ、そ
うことをあけることなんか、ないもの。
それまでに、またたく星号ほしごうを、かえ
しておけばいいのさ。」

フィードルは、北きたの冬ふゆの森もりをぬけ
だし、あざみのはら町まちという、どう
ぶつたちのすむ、小ちいさな町まちにやっ
てきました。そして、クリスマスのそ
りをつかって、はいたつやのしごと
をはじめたのでした。

「ふう……あつい夏は、にがてだ。」

フィードルは、タオルであせをふきながら、せんぷうきのまゐるボタンを、プチンとおしました。せんぷうきの風は、さつきよりもつよくなりました。

すると、つくえの上にあった一まいの紙が、風にのつて、ふわーりとまいあがりました。それからゆつくりと、フィードルの足もとに、おちてきました。それは、きのう、町じゅうにくばった、フィードルのみせの、せんでんのビラでした。

フィードルは、せかいじゅうの
食べもののなかで、サンドイッチ
がいちばんすきでした。

「『すごく大きいもの……サンド
イッチをたくさん』っていうのは、
よくなかったかなあ。『たくさん』
じゃなくて、『四つか五つ』と書い
たほうが、おきやくがきてくれた
かもしれない。」

フィードルは、ビラを見ながら
ためいきをつきました。

みせの入り口ぐちの、ガラスのドアには、大おおきな赤あかい字じで、

はいたつや フィードル

と書かいてあります。

おもての通とおりから見みれば、

はいたつや フィードル

と読よめますが、みせの中なかから見みると、文も字じのうらとおもてが、ひっくりかえっています。

その、ひっくりかえった文も字じのあいだで、

ふたつの目めが、きよろきよろとうごきました。だれかが、みせの中なかを、のぞいているのです。

カチャリ

ドアがあいて、ぎん色いろのめがねをかけたやぎが、はいつてきました。あつい日ひだというのに、きちんとネクタイをしめていて、あごひげも、きれいにとかしてありました。

（どこか、大きな会社おおかいしゃの、社長しやちやうさんかな？）

と、フィードルは思おもいました。

じつは、このやぎは、紙^{かみ}のれきしをけんきゅうしている、えらい学者^{がくしゃ}の、メエメはかせですが、あざみのはら町^{まち}にきたばかりのフィードルは、まだ、はかせのことを知り^しませんでした。

「きみが、はいたつやさんかね？」

「はい、そうでございます。」

フィードルが、ていねいにこたえと、メエメはかせはズボンのポケットから、一本^{ぽん}のにんじんをとりだしました。

「こんなものでも、とどけてもらえるかね？」

「はい、おきやくさま。にんじんでも、だいこんでも、なんだって、おとどけいたします。」

フィードルは、大^{おお}はりきり。なんといつても、はじめてのお

きやくさんがきたのですから。

「いや、これは、ただのにんじんでは、ないんだな。ほれ。」

と、メエメはかせはフィードルに、そのにんじんを、わたししました。

「あれ、あながあいてる。」

フィードルは、ぼうえんきようをのぞくように、にんじんのあなを、のぞきました。

すると、むこうがわに、メエメはかせのネクタイのようが見え^みました。メエメはかせは、いいました。

「きのう、友^{とも}だちのサラブくんが、うちにきて、この、にんじんパイプを、わすれていってしまったんだ。」